

一日三食サツマイモ

パプアニューギニア高地タリ盆地における主食はサツマイモである。人々のエネルギー摂取量の実に八〇パーセントがサツマイモでまかなわれ、成人一日あたり約二キログラムのサツマイモが食べられている。日本の焼き芋でつかわれる中くらいのサツマイモが一個あたり三〇〇グラム程度であるから、それを一日に七個は食べるわけである。調査で村に住んでいたとき、私は朝飯で二個、昼飯一個、晩飯三個のサツマイモを食べることをノルマとしていたが、これはなかなか大変なことであった。

当然のことながら、タリ盆地における生業はサツマイモ耕作を中心として成立している。初めてタリを訪れたときの飛行機からみえた盆地一面のサツマイモ畑は、幅二～三メートルの溝によって直線的に区画され、そこには直径三～四メートルのマウンドが整然とならんでいた。パプアニューギニアといえば粗放な焼畑をイメージしていた私にとって、このタリ盆地の景観は大変なおどろきであった。その後、実際に調べた結果では、タリ盆地におけるサツマイモの単位面積あたり収穫量は一ヘクタールあたり年間一二～一五トンと推定され、化学肥料を使わない農耕としてはきわめて高い生産性であることがわかっている。

更新されるサツマイモの品種

現在、タリ盆地では四〇品種ものサツマイモが栽培されている。サツマイモの種類は形、大きさ、皮の色、中身の色、葉の形などで識別され、それぞれにタリの言葉で名前がつけられている。これらのサツマイモについて、老人たちは、「自分たちが若い頃に食べていたものは一つもない、現在タリ盆地で栽培されている種類はその全てが他地域からもちこまれたものである」という。生産性が高く味の良いサツマイモが昔のサツマイモにおきかわっていったのかと思い、「昔のイモより今のイモのほうがたくさん獲れて味もよいのか」と聞いてみても、「あまり変わらない」というのがおおかたの意見である。ではどうしてサツマイモの種類がそんなにいれかわったのだろうか。

印象的だったのは、人々が新品種のサツマイモに強い興味を示すということである。ある日、隣の家でごちそうになったとき、「このサツマイモは新しいやつだ」といわれ食べてみると、なるほどそれはタリ盆地にそれまでなかった品種のサツマイモだった。名前はハーゲンヒナ（ハーゲンは西高地州の州都、ヒナはタリの言葉でサツマイモの意味）といっ、その名のとおり西高地州からイモ蔓として持ち込まれたのだという。このような新しいサツマイモの情報は人づてに伝わりイモ蔓が取引され（無償のこともあれば有償のこともある）盆地の隅々まで広がっていく。皆でひとしきりそのイモの品評会をやった。

右手に主食のサツマイモ、左手におかずのサツマイモ

そうやって毎日サツマイモを食べていると、私にも「イモの味」がわかるようになるものである。好きなイモと嫌いなイモというのもでてきて、食事のたびに「今日はマメヒナを食べよう」などとサツマイモの種類を選ぶようになる。ある時、人々のサツマイモの好みが私の好みとどのように違っているのかを調べてみようと思、サツマイモを好きな順に並べてもらうことにした。ところが、人々から返ってきた答えは、「順番をつけるのは無理だ。どんなイモも毎日食べていれば飽きてくるし、たまに食べるとうまい。あえていえば最近入ってきたハーゲンヒナがうまいが、これもそのうち飽きるだろう」というものであった。「そうはいっても、コンドカンデビヒナ（水っぽくて私よりも嫌いだった）はたまに食べてもうまくないだろう」ときいてみると、「あれはあれで他のイモのおかずだと思って一緒に食べれば喉の通りがよくなるから捨てがたい」という答えであった。

結局のところ、タリの人々にとって大事なものは、いろいろなサツマイモをバランスよく食べることであり、だからこそ新品種のサツマイモが大人気になるのではないだろうか。そしてこのような人々の嗜好が四〇種類の品種を維持し更新していく原動力になっているのだと思う。私のように特定のイモだけをうまいといっているようでは、まだまだサツマイモの味がわかったことにはならないのだ。

タリ盆地のことばで畑を意味する「マブ」は、タロイモ（マ）を集めた（ブ）場所という意味であり、およそ三〇〇年前まではサツマイモではなくタロイモが人々の主食であったことがわかっている。サツマイモがタリ盆地に登場してからの時間はわずかに三〇〇年間、その間にどれだけ品種が入れかわったのだろうか。蛇足ながら、タリ盆地のサツマイ

モは、他の地域のサツマイモに比べて質のよいタンパク質を多量に含むことがわかっている。これが人々の意識せざる努力の結果であるかどうかはわからないが。